90

森 林太郎（森 鷗外）と解剖学講義について

島田　和幸

鹿児島大学大学院医歯学総合研究科 神経病学講座 人体構造解剖学分野

我が国で初めて明治22年（1889）に美術教育を専門とする東京美術学校（現東京藝術大学美術学部）が創設され，美術解剖学の講義が組み込まれ，明治24年（1891）ドイツ留学から帰国したばかりの森林太郎（鷗外）を専修科美術解剖学講師として招聘して，美術解剖学講義が行われる様になった.

森林太郎（鷗外）は文学書や医学の著書を数多く残しており，鷗外に関する研究・報告がなされているが『藝用解體學』に関係する報告は少なく，『藝用解體學』に関する記載内容等の検討に関してはこれまで殆ど皆無である．ただこの書の内容は岩波書店から昭和28年発行出版された『鷗外全集著作篇』第二十九巻で公開されている．これまでの報告はKollmannの解剖学教科書と『藝用解體學』の比較をその内容から科学史，芸術史の面から考察した報告はあるが，解剖学的に内容にまでは踏み込んでいない．今回は『藝用解體學』の原本とされているKollmann及びHarlessの解剖学書を底本として解剖学的な見地から比較検討した.

『藝用解體學』の原本とされている書は“Plastishe Anatomie des Menschlichen Körpers ein handbuch für Künstler und Kunstfreunde”（1886）である．原本と，『藝用解體學』の中にどの様に引用・記述・転載がなされているかについて両書を比較した.『藝用解體學』の記載内容を通読してみると，Kollmannの第二部に相当する項目の箇所については原本には認められないが導入に始まり第一部，第二部の第三章までの全体の記載事項は『藝用解體學』の目次内容の2/3でほぼKollmanの書の記載内容と一致を見た．またKollmannに沿った記載の箇所はすべて簡訳もしくは要約であった.『藝用解體學』の芸術作品に対する解剖学的な解説のところは鷗外によるオリジナル性よりもむしろKollmannの記述からの引用であることが原書の詳読より判明する．このことより『藝用解體學』は大半はKollmannの簡約美術解剖書と言える．しかし残りの1/3の箇所はKollmannの書からではない．著者の調査によると，1856年に出版されたHarless Emil著の“Lehrbuch der Plastischen Anatomie für akademische Anstalten und zum Selbstunterricht”に従っている．主としてこの書は三部から構成されている．第一部は“Der Kopf”（頭部）で各頭蓋顔面骨について，頭蓋の成長発育，頭蓋の人種差，顔の形態と表情筋，目の位置，眼球運動と表情などの記載である．第二部は“Der Rumpf”（体幹）で頚，胸，上・下肢を構成する各骨についてとそれぞれの各骨の部位に付着する筋群，さらに上腕・手及び下肢・足の運動機能が詳述されている．第三部は“Die ganze Figur”（人物外観）でこの章に著者は最も力を入れた記述を行なっている項目である．人体における動作の重心点，普段の日常生活に行われる運動・動作，色々のポーズ，走行運動，ジャンプなどや人体プロポーション比率，各年齢における成長発育に供う人体の計測値などである．Harlessの美術解剖書は美術家に必要な頭部，体幹部についての詳細な解剖学的記載と共に運動機能生理がこと細かく記され，また人類学的な記載，人体各部の計測データーなどが詳細であり，森の『藝用解體學』の第二部はHarlessの書の三部からの引用が多いことが判明した.